

英語を取り巻く現状

至る2020年の東京オリンピックとパラリンピック、そして、2025年には大阪万博を控え、外国人の訪日者数は増加の一途をたどり（平成24年に約800万人→平成27年に約900万人）、小松市でも、小松大学に国際文化交流学部が創設されることからわかるよう、『外国人を目にする機会』や『英語の必要性を身近に感じる機会』が増えてきました。しかし、それに反して英語を苦手と感じる子供達が多いのも事実です。現在、文部科学省は『5割以上の生徒が、中学卒業時に英検3級程度以上を達成』を目標に掲げていますが実情は程遠く、そこで期待されているのが『英語教育改革』なのです。国は、小学校・中学校・高等学校の各段階を通じて英語教育を充実させることで、学生の英語力を向上させようとしています。そして近い将来、大学入試でも英語の会話能力が問われる方式に変化していきます。具体的には、現在の大学入試での〈読む〉力を測る比率が高い試験』の方式から『〈聞く〉〈読む〉〈話す〉〈書く〉の4つの技能を測る試験』に移行することや、また、2020年度からは、国の意向で大学入試の制度を現状の〈聞く〉〈読む〉の2つの技能を測るマークシート式の試験』に加えて〈聞く〉〈読む〉〈話す〉〈書く〉の4つの技能を測ることに適した民間の資格、及び、検定試験（GTEC・英検・TOEICなど）』との併用を可能とする方針をとるようになるなど、小学校から大学入試までの英語のあり方が総合で変化します。

小学5・6年生で年間70単位時間、単語数600～700語に！

小学校の英語教育は、2020年度から変わります。2018年度現在は、年間35単位時間（週1コマ）程度ですが、2020年度からは、小学3・4年生で年間35単位時間。小学5・6年生で年間70単位時間の実施が予定されています。また、これまでは扱う単語数の規定がありませんでしたが、**今後は小学生の間に600～700語程度に触れる**と定められました。2018年度現在は、中学校で扱う単語数が1,200語程度ですが、今後は大幅な変更になることが決定しているのです。本格的な実施は2020年度からなのですが、すでに一部が2018年度から一足早く始まっています。2018年度現在の小学6年生のお子さんは、‘We Can!’という新教材を使っています。ここで使われている単語数は、2018年度以前の中学基本単語（中学1年生レベル）をはるかに超える分量となっているのですが、中学校に入るとこれらの単語は、すでに小学校で習っていて知っているものとして扱われます。

しかし、実際は単語の練習はほとんどされていません。

さらに、2018年度現在の小学6年生が中学3年生になる頃には教科書が新しく変わり、『中学校で扱う単語数が現状の1200語から2500語に、文法は2018年度の高校で習う原形不定詞・現在完了進行形・仮定法も習う』ことになっています。もし、高校生のお子さんがおられるなら聞いてみてください。かなり驚かれることになるかと思いますが、これらは今までのように『なんとなく知っている』程度の文法力では絶対に理解できないレベルなのです。単純に3つの項目が増えただけでなく、知らないと理解できない項目がたくさん存在します。そうすると当然、前倒しで大事なポイントを中学1年生

の最初の時期からしっかりと学び、理解しながら積み重ねていかないと追いつきません。つまり、中学3年生が部活終了後に塾に通うようでは到底間に合わないのです。その後に彼らは、高校3年生の時に4つの技能で大学入試を行っていくことになります。もちろん、学校では英語を使って話したり書いたりするような演習をほとんどやらないにも関わらず…。だからこそ英語を早い段階で本格的に始めたほうが賢明です。英語で会話ができるようになることは理想なのですが、この勉強と英会話とはまったく別ものです。それでは学校の試験での点数は絶対にとれません。なぜなら、テストはこれからも紙に書いて行われるものだからです。きちんと基礎から教えてくれる塾で、しっかり点数の取れる英語をいっしょに楽しく学びませんか？

